

第1章 流通における余剰

1.1 二つの交換論

1.1.1 欲求と交換

交換を引き起こす原動力は何か。この問いに対し、経済学は、人間の欲求であると答えてきた。人間の欲求こそが交換の基盤である。このような理解は、現代経済学の祖とされるアダム・スミスの次の言葉のなかにも見て取ることができる。

他人にある種の取引を申し出るものはだれでも右のように提案するのである。私の欲しい want ものをください、そうすればあなたの望む want これをあげましょう、というのが、すべてのこういう申し出の意味なのであり、こういうふうにしてわれわれは、自分たちの必要としている他人の行為の大部分をたがいに受け取りあうのである。(Smith (1776)p.??, 訳 I-26 頁)

私の「欲しい want」ものと他人の「望む want」ものとが交換される。この構図が市場の原型であるということは、今日の経済学——マルクス派も例外ではない——では、改めて論ずるまでもない、自明なことと考えられている。個人の欲求から出発し、その充足を求めて交換が拡大していくところに成立したものが市場である。こうした市場像は、利得の最大化を追求するという近代的人間観に慣れ親しんだ目からは、疑う余地すらないもののように見える。

しかしながら、このような市場の見方は、スミスの生きた時代には決して当たり前のもではなかった。スミスの同時代人や彼に先行する思想家たちにとっては、欲求が交換を惹起するということは自明ではなく、むしろ人間の欲求は交換とは容易に結びつかないと考えられていた。例えば、ロックは次のように述べている。

たとえば、ここに一つの島があって、これが世界の他の部分との一切の交易から隔絶されていると仮定しよう。そこにはわずかに百家族しか住んでいないのに、羊、馬、牛、その他の有用な動物と、栄養のある果物と、十万倍の数の人々を養う穀物を産するに足る十分な土地とがある。しかしその島には、それがありふれているという理由からか、あるいは腐敗しやすいという理由からか、貨幣の代わりにするのに適したものが皆無だとしよう。とすれば、こんなところで、自分自身の勤労が生み出したものにせよ、あるいは他人の同じように腐敗しやすく有用な日用品と交換できるものにせよ、自分の家族が使用する以上に、そしてその消費を十分に満たす以上に、所有物を拡大する理由がだれにありえようか。(Loche (1689)p.??, 訳 222-223 頁)

ロックによれば、貨幣のない世界では、人間の欲求は狭い限界のうちに閉ざされたままであり、それゆえ、欲求に基づいた交換は広範なものとはなりえない。これは現代の経済学者が素朴な

ちで抱いている市場の発生史観、すなわち、人間が欲求を充たすために交換を拡大していくなかで、貨幣を備えた市場が発生してきたという見方とは明らかに異なる。ロックの立場からすれば、欲求を市場の出発点に置くことはまったく適当ではない。なぜなら、人間本来の欲求はその乏しさゆえに、交換の発展をむしろ阻害することになるからである。同様の理解は、ヒュームの著作のなかにも発見することができる。

いかなる国家であれ、成立初期未開から程遠からぬ時代には、それゆえ、想像力が自分自身の生み出した欲望と自然の与えた欲求との見分けがつかなくなってしまうようにならぬ時代には、ひとびとは自分の畑でとれる産物やそうした産物に自分のところで手を加えて作り上げることのできる粗末な加工品で満足し、交換を求める必要ないし誘因はひとびとにほとんどありません。(Hume (1752)p.??, 訳(下)63頁)

このようにヒュームも、初期未開の時代においては、ひとびとは与えられた生活に満足しているため、さらなる欲求の充足を求めて交換を拡大していく誘因は存在しえないと考えている。さらに、ヒュームは、交換を求める誘因の欠如が「練度 skill と生産活動とを高めてゆく誘因」(Hume (1752)p.??, 訳(下)17頁)の欠如をもたらすと指摘しているが、ステュアートは、この点について、より明確に、欲求が勤労を制限すると述べた。

貨幣も、またそれに相当する物もない国では、人類の欲望はわずかな対象、すなわち飢え、乾き、寒さ、暑さ、危険などの不安を取り除くことに限定されるものと思われる。自分の勤労によって質素な生活を楽しめる物をすべて獲得できる自由人は、休息を享受して、それ以上は働かないだろう。こうして一般に、いまいった目的に対応する需要が充たされればたちまち、仕事の増加はいっさい止むだろう。(Steuart (1752)I, p.237, 訳第1・2編 165-166頁)

奴隷とは異なり、他人に労働を強制されることのない「自由人」は、限られた欲求が充たされるならば、それ以上は働こうとしないだろうとステュアートは推論する。ステュアートの議論では、勤労が交易を促進するのだから、欲求が限定されているならば、「勤労はおのずと停止し、またその結果として物々交換も止んでしまう」(同上)ことになる。このような状態をステュアートは、増殖の「社会的不能」(Steuart (1752)I, p.39, 訳第1・2編 28頁)と呼んだのである。

このように、ロック、ヒューム、ステュアートのような他の点では少なからず立場を異にする論者が、欲求と交換の関係については、共通した見解をもっている。すなわち、彼らによれば、人間の本来の欲求は、その狭隘さゆえに市場の発展を妨げることになる。何らかのかたちでこの障碍が解除されない限り、交換は決して広範なものとはなりえない。このような理解は、欲求から交換が直接に引き起こされるという今日の支配的な見方とは対照的である。

人間の欲求は交換を促進するのか、あるいはそれを阻害するのか。欲求が交換に及ぼす効果に対する相反する見方は、欲求についての異なった理解から生じている。現代の経済学においては、人間の欲求はほとんど無限の広がり大きさをもつと想定されている。この想定のもとでは、欲求を充足するための手段は、欲求に対しつねに稀少となる。これに対し、ロックらの考え方によれば、人間の欲求は限られているため、一定の限度に到達すれば、欲求は充足されて止むことになる。欲求を充たす手段は、その量に応じて、稀少なこともあれば過剰なこともあるだろうが、欲求の限度を越えてなお過剰を拡大しようという誘因は、人間の自然な欲求だけからは生まれてこない。

このような欲求の捉え方の違いに対応して、欲求が交換に対して与える正反対の影響が引き出される。すなわち、前者においては、欲求の無限性ゆえに交換は無際限に拡大していくが、後者によれば、欲求には限りがあり、このため、交換が行なわれるにしてもその広がりには有限の欲求によって制限されることになる¹。

1.1.2 奢侈と交換— ロック・ヒュームの交換論

市場の発展とともに人間の欲求が飛躍的に拡大していったその後の歴史を知る者にとっては、人間の欲求を有限なものとするロックらの立場は、欲求のもつ柔軟性を過小評価しているように見える。しかしながら、彼らは、ただたんに欲求を有限なものとして捉えていたわけではない。彼らが欲求の有限性を強調したのは、それとは異なった質の欲求を際立たせるためであった。おそらくは、資本主義の生成期にあって、そうした異質の欲求が台頭してくるのを目の当たりにした彼らは、これをいかに位置づけるかに苦慮したのであった²。有限な欲求とは区別されるこの種の欲求についての議論は、奢侈 luxury という語を巡って展開された。

17・8世紀の思想家たちにとって、奢侈はもっとも重要な問題のひとつであった。特に、マンデヴィルの『蜂の寓話』の発表以後、奢侈を巡る議論は、イングランドのみならず、スコットランドとフランスをも巻き込んだ論争へと発展していく³。当時の奢侈的消費の異常な加熱ぶりに対し、ある者は墮落であるとして批判し（ルソー）、ある者は技芸の洗練であるとして賞賛し（ヒューム）また、ある者は悪徳ではあるが社会全体にとっては有益であるとして擁護した（マンデヴィル）。

英語の奢侈 luxury（フランス語では luxe）という言葉は、ラテン語の luxus に由来し、それはもともと豊富や過剰という意味をもっていた。この原義から言えば、奢侈とはある限度を越える過剰性を含意している。問題は奢侈が何に対しての過剰であるのだが、その評価の相違にもかかわらず、奢侈とは欲求に対する過剰であるというのが当時の一致した見解であった。このような奢侈の捉え方は一見すると矛盾したものに見える。なぜなら、奢侈が欲求を超えるものだとするならば、それは定義上欲求の対象ではないはずだが、奢侈論争の引き金となったのは、まさに奢侈が尽きせぬ欲求の対象として立ち現われてきたという事実であったからだ。

欲求を超える余剰という奢侈のこの定義は、当時の思想家たちが共有していた欲求観を踏まえなければ理解することは難しい。すでに見たように、彼らは、欲求を有限なものとして捉えていたのだが、その欲求の範囲は、現代の欲求観からすれば著しく狭いものである。彼らにとって、欲求 want とは、必要 necessary に対する欲求 need のことにほかならなかった。今日の一般的な理解では、必要も奢侈もともに欲求の対象であり、したがって、両者の区別は相対的で、截然とは区別できない。このような見地から、あえて奢侈を規定するとすれば、商品の用途や消費のあり方によって区別するか、何らかの価値判断に訴えるかしかない。しかし、17・8世紀の思想家たちにとっては、線引きの困難はあるにせよ、両者が異なることは明らかであった⁴。というのも、彼らは、奢

¹ ボランニーは、アリストテレスについて「人間はほかの動物同様、本来自給自足的なものである、というのがアリストテレスの描く像であった。したがって、人間の経済は人間の欲望や必要の無限性—今日の用語でいえば、稀少性の事実—から派生するものではなかったのである」（Polanyi et al. (1957)p.??, 訳 188 頁）と述べている。この解釈に従うならば、欲求を有限なものとする見方は、17・8世紀の思想家たちに固有なものというよりも、アリストテレス以来の西欧の伝統的な欲求観なのかもしれない。

² この新たな欲求—後述する奢侈に対する欲望—の勃興とそれに伴う社会変化については Sombart (1912)Kap.4 参照。

³ 17・8世紀における奢侈を巡る論争については、森村 (1993) 第7章、Berry (1994)chap.6 を参照。

⁴ マンデヴィルは、次のように述べて奢侈についての相対的な見方を示しているが、それが当時の常識に反するものであったことに注意すべきである。「人間を生き物として存続させるのに直接必要でないものはすべて奢侈であるとすれば（厳密に

侈に対する欲求を必要に対する欲求とは異質の情念として捉えていたからだ。例えば、ロックは、奢侈に対する欲求を言い表わす際に、必要に対する「欲求 want」とは別の「欲望 desire」⁵という語をあてている。また、ルソーは、「自尊心(虚栄心) amour-propre」を自己保存の欲求としての「自己愛 amour de soi」からは明確に区別すべきだと主張している⁶。こうした点から、17・8世紀の思想家たちの多くが、必要に対する欲求 want/need と奢侈に結びつく欲望 desire とを異なった情念として理解していたことが窺える。この理解を前提にすれば、欲求を超える余剰という奢侈の定義は必ずしも形容矛盾とは言えない。奢侈は、欲求 want/need にとっては確かに過剰であるが、欲望 desire に対してはその対象となりうるのである。

このような欲求と欲望の区別を踏まえた上で、奢侈を巡る17・8世紀の議論を振り返ってみると、当時の思想家たちの多くが、欲求ではなく欲望こそが交換の起動力をなすと理解していることに気づかされる。こうした理解は、奢侈的消費の興隆という歴史的現実には制約されたものにすぎないように見える。しかしながら、たんなる事実の反映に思えるこの見方の背後には、市場についての独特の見方が伏在しているのである。交換に関するロックとヒュームの所説の検討を通じて、この点を析出してみよう。

先の引用にあるように、ロックは、貨幣のない世界を議論の出発点に置く。このような世界では、余剰は存在しないとされるのだが、それは余剰を生産しうる能力が欠けているためではない。貨幣のない世界では、そもそも余剰を生産する誘因がないのである。なぜなら、自分の消費能力を超える余剰を生産したとしても、ここでは腐敗するにまかせるほかはなく、結局は無駄になってしまうからだ⁷。

貨幣のない世界とは、「人間の生活にとって真に有用なもの」(221)、必要に対する欲求だけの世界であるが、ロックによれば、そこでは交換は行なわれない。交換は、「人間の愛好とか合意によって価値を与えられているもの」(221)、すなわち、奢侈的なものに対する欲望のもとではじめて発生する。金・銀やダイヤモンドのような耐久性のある奢侈を交換によって取得するために、自分の必要を超えて余剰を生産しようという衝動が生じてくるのである。人間の欲求によって限界づけられ、腐敗によって制約される必要だけの世界とは異なり、奢侈のある世界では、欲求の制限と腐敗の制約から解放されて交換が無際限に拡大していくことができる⁸。

「奢侈について Of luxury」⁹という論考を表わしたこともあるヒュームは、ロックにもまして、奢侈が交換に及ぼす影響を強調した。ロックと同様、ヒュームも、必要に対する欲求だけの世界では、交換は発展しないと考える。しかし、ロックが、貨幣の発生と奢侈に対する欲望の形成を同視していたのに対し、貨幣は商品流通の「潤滑油」(Hume (1752)p.??, 訳(下)51頁)にすぎないと

はそうであるべきだ)世の中には、裸の未開人にあつてさえ、奢侈のほかにはなにも見出すことができない」(Mandeville (1714)p.??, 訳 101頁)

⁵Loche (1689)p.??, 訳 215頁。なお、この邦訳では want は「必要」と訳されており、奢侈に対する「欲望 desire」との区別がより明確にされているが、他方で、両者の対比は見えにくくなっている。

⁶Rousseau (1754)p.??, 訳 167-168。

⁷ロックは、所有権に対し有名な但し書き——「少なくとも(自然の恵みが)共有物として他人にも十分に、そして同じようにたつぷりと残されている場合には」(Loche (1689)p.??, 訳 209頁)——を付帯したが、その他に所有権を制限するものとして腐敗による制約を挙げている。「ものがそこなわれないうちに生活の何かの便宜のために人が利用できるかぎり、だれでも自分の労働によって所有権を定めてよいのである。これを超過するものはすべて彼の分け前以上のものであり、他人のものなのである」(Loche (1689)p.??, 訳 211頁)。

⁸ロックは、奢侈における制約の解除を次のように指摘している。「彼はこういう〔貴金属やダイヤモンドのような〕耐久性のある品物を好きなだけたくさん蓄積してもよかったのである。なぜなら、彼の正当な所有権の限界をこえるのは、彼の所有物が大きいときではなく、彼の手中において何かが無駄に腐ってしまうときだからである」(223)。

⁹Hume (1752)の初版(1752年)から1758年版まで「奢侈について Of luxury」と題されていた論考は、その後、「技芸の洗練と進歩について Of refinement in the arts」と改題された。訳書 265頁註(1)参照。

いう立場から、ヒュームは交換の拡大は奢侈に対する欲望に懸かっていると明確に主張した。

ひとびとが享受する財貨すべてに洗練の手が加わり始めると、そして、ひとびとが、必ずしも家庭でばかりその生活を送らぬようになりはじめると、そしてまた、近隣で生産されるものだけで満足せぬようになると、あらゆる種類の交換と取引がより頻繁となり、より多くの貨幣がそれらの交換に介入するようになります。(Hume (1752)p.??, 訳(下)64頁)

洗練された奢侈の登場によって、ひとびとの欲望は掻き立てられ、貨幣を介した交換が頻繁に行なわれるようになる。このように、ヒュームは、奢侈に対する欲望が交換に及ぼす影響を指摘したが、そこからさらに踏み込んで、奢侈と生産との関係にも言及している。すなわち、技芸の洗練によって、奢侈に対する欲望が刺激されると、奢侈を獲得するために「練度 skill と生産活動」(17)は高められ、より多くの余剰が生産されるようになる。もっとも、奢侈のない世界では、「練度 skill と生産活動」を高めていくことが潜在的に可能であっても、余剰は生産されないと述べていることから分かるように、交換の原動力は、あくまでも生産水準ではなく、奢侈に対する欲望の側に存するとヒュームは見ているのである¹⁰。

ロックとヒュームの主張は少なからず相違しているのだが、両者の交換に対する見方は、次の二つの点で共通している。

第一に、ロックとヒュームは、欲しい want ものと欲しい want ものものが交換されるという構図とはまったく異なった市場像を抱いている。ロックとヒュームによれば、欲求 want/need に基づく交換は、たとえそれがなされるとしてもすぐに壁に突き当たってしまう。ここから、欲求の限度を超えてなお交換が拡大していくためには、奢侈に対する欲望が介在する必要があるという主張が導かれる。この意味で、ロックとヒュームの主張は、奢侈=交換論と呼ぶことができる。

第二に、ロックとヒュームの議論では、余剰を生産する能力の大きさは、交換の拡大における積極的な役割を担っていない。彼らによれば、必要だけの世界では、余剰が潜在的に存在したとしても、奢侈に対する欲望の不在ゆえに、そうした余剰は現実には生産されえない。生産力ではなく、奢侈に対する欲望が交換の発達を牽引するというのが、ロックとヒュームの市場に対する基本的な見方なのである。

1.1.3 奢侈から必要へー スミスの交換論

奢侈=交換論とは対照的に、スミスは交換は必要に対する欲求から引き起こされると説いた。むしろ、欲求と欲望の区別という当時の議論の前提をスミスは同時代人として十分承知していた。実際、スミスが『道徳感情論』で論じた主題は、必要に対する欲求に還元されえない欲望(ルソーのいう「自尊心(虚栄心) amour-propre」)の次元に関わるものであった¹¹。しかし、『国富論』で欲望ではなく欲求 want を交換の起点に据えるとき、あるいは、諸国民の富が奢侈品を除いた「生活

¹⁰ 「もし彼らの練度と生産活動とが高まってゆくなれば、彼らを維持するに必要な食糧を大きく上回る多量の余剰生産物が彼らの労働から必然的に生じてきます。しかし、〔工業活動も機械的技芸も欠如しているので〕練度と生産活動とを高めてゆく誘因が彼らには全くありません。というのは、そのような余剰生産物を彼らの快楽か虚飾かのどちらかに役立つような何らかの財貨と交換することが彼らには不可能であるからです」(17頁、括弧内訳者)

¹¹ 特に、Smith (1754)I, iii, 2 参照。また、『道徳感情論』では、奢侈の及ぼす影響についてのヒュームによく似た議論—ストア主義的色彩を帯びてはいるが—も転回されている (Smith (1754)IV, 1)。

の必需品 necessities と便益品 conveniences のすべて」(Smith (1776)p.?, 訳 I-1 頁) から成ると述べる時、スミスは、奢侈に対する欲望の問題を捨象しているように思われる¹²。

とはいえ、この奢侈に対する欲望の捨象は、欲求を無際限なものと見る近代的な欲求観に『国富論』のスミスが染まっていたことを意味するわけではない¹³。むしろ、次のような交換の描写からは、必要に対する欲求とそれを超える余剰の古典的区別をスミスが堅持していることを見て取ることができる。

分業がひとたび完全に確立すると、人が自分自身の労働の生産物によって満たすことのできるのは、彼の欲求 wants のうちのごく小さい部分にすぎなくなる。かれは、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を上回る余剰部分 surplus part を、他人の労働生産物のうち自分が必要 occasion とする部分と交換することによって、自分の欲求の大部分を満たす。(Smith (1776)p.??, 訳 I-39 頁、訳文は変えてある)

「欲求 wants」と「消費を上回る余剰部分 surplus part」というこの区分は、17・8世紀の他の思想家たちと共通のものだが、スミスの特徴は、「余剰部分 surplus part」が奢侈とはなく、「自分が必要 occasion とする部分」と交換されるとした点である。こうしてみると、この節の冒頭にあげたスミスの文章を人間の無際限な欲求が交換が市場の基礎にあるという主張と見なすのは適当でないことが分かる。このような解釈は、現代の欲求観をスミスに投影したものにすぎない。スミスは、有限の欲求とそれを超える余剰という区別をあくまで前提とした上で、ロックやヒュームとは対照的に、必要に対する欲求を交換の基底に据えたのである。スミスのこの立場は、ロック・ヒュームの奢侈=交換論に対して、必要=交換論と呼ぶことができよう。

前述したように、ロック・ヒュームの奢侈=交換論においては、いかにして交換が欲求の有限性に制約されることなく拡大していくことができるか、というのが問題の焦点であった。換言すれば、それは、必要が充足されたうえで、なお交換が行なわれるのはいかにしてか、という問いであった。反対に、スミスの場合には、必要の充足ではなく欠如が交換の出発点になっている。しかし、他方で、スミスは古典的な欲求観、すなわち、必要に対する有限な欲求という見方を保持している。このため、スミスの交換論においては、交換の進展が諸個人がどの程度必要を欠いているかに規定されることになってしまう。

諸個人が必要を欠く程度は外生的に決まるはずだが、スミスは、次のような手続きを踏んでこれを内生化する。まず、独立した諸個人、必要のすべてを自給自足する諸個人を出発点に置く。この諸個人は交換しようとする性向をもつとされるが、それだけでは、交換が行なわれることにはならない。個々の労働生産力の差異が交換性向を現実のものにする。すなわち、生産性の高い労働に特

¹²Hirschman (1977)p.??, 訳 102-114 頁、内田 (1971)132-157 頁参照。スミスが欲望または「自尊心(虚栄心) amour-propre」を捨棄した理由についての両者の解釈は異なる。Hirschman (1977) は、「アダム・スミスが彼以前の論者よりはるかに『人類の大部分を占める民衆 great mob of mankind』、すなわち平均的な人間の行動に感心があった」(p.111, 訳 112 頁) ために、『国富論』においては、必要に対する欲求に焦点が絞られるようになったと述べている。一方、内田 (1971) は、逆に、ルソーの「自尊心(利己心) amour-propre」(欲望)を人間の普遍の本性と捉えなおした上で、「個人の利己的行動が社会的善につながる、そういう制度があるはずだ」(139 頁) というのがスミスの主張であったと理解している。また、内田は別の著作で、スミスの作用原因と目的原因の区別から、富概念の二面的な把握という興味深い指摘を行なっている。「行為の原動力を規定するものとしての富—このかぎり富は使用価値ではなく、社会的地位=支配力の表示(『富は力である』)—と、過程の final cause たる真実の富—このかぎり『富は生活の必需品および便益品』」(内田 (1953)114 頁)。

¹³Hont and Ignatieff によれば、当時の現実からしても、いわゆる「経済人」をスミスが自明のものとすることはできなかったという。「自らヨーロッパの経済発展の周縁にある貧国の住民として、ヒュームもスミスも彼らの分析において、『経済人 economic man』を当然視できるどころか、その歴史的可能性をひとつの心理学的類型として説明しなければならぬことを、鋭く意識させられていた」(Hont and Ignatieff (1983)p.9, 訳 11 頁)

化して、互いの必要を交換し合った方が自分の利益にかなうと知ると、諸個人は特定の仕事に専念し、社会的分業が行なわれるようになる¹⁴。このような分業によって、必要の欠如が生じると同時に、必要の充足を求めて交換が行なわれる。他方で、分業がなされるのも交換を期待してのことである。ここでは、分業がなければ交換は行なわれなし、交換がなければ分業は存在しないというかたちで、分業と交換は相互に前提しあう関係にある¹⁵。

スミスの必要=交換論は、交換の動因は余剰を生産する能力ではないとする奢侈=交換論の第二の点とも対立する。分業は「特定の業務に対してもっている才能や天分」(28)の相違に基づくが、スミスによれば、「天分の差異は、多くの場合、分業の原因だというよりもむしろその結果なのである」(28)から、分業自体が天分の差異をつくりだす効果をもつ。結果として、分業は、必要の欠如と生むと同時に、労働者の技能を高めて、生産力を上昇させ、初発の自足した状態を超える余剰をつくりだすことになる。

生産力が上昇する要因があったとしても必要だけの世界では、市場の発達は見えないというのがロックやヒュームの一致した見解であった。必要だけの世界では、生産力の上昇が潜在的には可能であったとしても、現実の余剰の生産には結びつかず、せいぜい労働時間の短縮に役立つにすぎない¹⁶。生産力は、市場の拡大の消極的条件ではあっても、積極的な要因にはなりえないとロックやヒュームが見たのは、このような理由からであった。必要だけの世界では、その需要の狭隘さによって、いずれ市場の発展が妨げられることになる。

しかし、スミスにしてみれば、これはあまりに静態的な見方ということになる。歴史的動態を考慮すれば、必要=交換論に基づいても市場の発達や国富の増大を説くことは十分可能である。スミスは、このことの根拠を生産力の上昇による余剰の増大が人口の増加を促すという点に求めた。生産力の上昇に伴う余剰の拡大は、より多くの人口を維持することを可能にする。スミスは、マルサスを先取りするような人口論に基づいて、労働の報酬の増加が「結婚と増殖」(136)を刺激して人口を増加させると考えた。ロックやヒュームの言うように個々の欲求に限度があるのは確かだとしても、人口そのものが増えるならば、社会全体の欲求は拡大しうる。スミスは、分業の拡大
生産力の上昇 余剰の増大 人口の増加 分業の拡大というスパイラルな成長論を唱えること

¹⁴Smith (1776)p.??, 訳 I-27-28 頁。

¹⁵このような分業と交換のトートロジカルな関係は、発生論としてはディレンマを抱え込むことになる。スミス自身もこの点は気づいていたようである。「市場がごく小さい場合には、どんな人も、一つの仕事に専念する気持ちにはとてもなれない。というのは、自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を上回る余剰部分のすべてを、他の人々の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することができないからである」(Smith (1776)p.??, 訳 I-31 頁)。自足した諸個人と分業と交換によって結ばれる諸個人との間には、決定的な跳躍点がある。

¹⁶ヒュームは、必要だけの世界では、「生産活動を疎む indolence 習慣が自然と広まってゆきます」(17)と述べている。

で、必要=交換論の枠内でも需要問題は解決されうると主張したのである¹⁷。

こうしてみると、スミスの交換論では、分業がきわめて重要な意味を担わされていることが分かる。すなわち、分業が必要の欠如を作り出すという点で、交換の前提をなすと同時に、分業が人口を増加させ、社会全体の欲求を拡大させるという点で、交換の推進力をなしているのである。スミスは、分業による必要の欠如が交換を引き起こすということによって、たんに交換の対象を奢侈から必要へと移しただけではない。スミスは、交換の発展が分業に基づく生産力の増進によって規定されると考えた。むしろ、ロックやヒュームにあっても、生産力は供給要因として捉えられてはいたが、需要要因である奢侈に対する欲望が起動されたときにそれははじめて意味をもつものであった。これに対し、スミスは、分業が二重の意味で欲求を作り出す—個人にとっては、必要の欠如を作り出し、社会全体にとっては、欲求の総和を拡大する—と見ることによって、生産を供給要因としてだけでなく、需要要因としても捉えたのである。

さらに、奢侈=交換論から必要=交換論への変移の背後には、重大な転回があることを見逃すことはできない。すなわち、スミスは、地主や大商人のような富者から労働者へと考察の焦点をずらしたのである。奢侈=交換論の場合、交換の担い手は、余剰を生産しうる富者であり、労働者は、せいぜい富者の求める奢侈の生産者として考慮されるにすぎなかった。スミスは、労働者、とくに、富の生産者であり消費者でもある生産的労働者を重視した。奢侈に対する欲望ではなく、必要に対する欲求をスミスが交換の起点に据えたことには、このような富者から労働者への視点の移行があったのである¹⁹。

¹⁷このような考えは、やや抽象レベルが異なるが、スミスの資本蓄積論（『国富論』第2編第3章）を参照することによって明らかになる。スミスによれば、「資本の蓄積と土地の占有」（80）のある社会では、土地と労働の生産物は、賃金と利潤と地代とに分かれる。説明の簡単化のために、いま地代を措くとすると、生産力の上昇による生産物の増加は、利潤を増加させることになる。ところが、資本の所有者の利潤追求が必要に対する欲求によって駆動されているとすると、必要が充たされれば、さらなる利潤を得ようとする積極的な理由はなくなる。こうした理由から、奢侈=交換論に立つステュアートは、勤労の繁栄のためには、フリー・ハンズの労働や奉仕を雇い入れる「洗練や奢侈に対する富者の好み」（31）—本稿の言い方では、奢侈に対する欲望—が不可欠だと説いた。これに対し、スミスは、奢侈の消費は生産的労働の雇用を意味するのであって、富の増進には寄与しないと主張する。利潤が生産的労働ではなく、生産的労働に向けられる場合に、資本は増加し、その結果として、国の富が増大する。言い換えれば、資本の所有者が、奢侈に対する欲望に囚われることなく「節約 parsimony」（528）し、生産的労働者を雇用する資本（賃金部分）を利潤から追加することによって国富は増大するのである。もっとも、賃金部分の拡大と言っても、個別の労働者の賃金が無際限に上昇していくと考えるわけにはいかない。「労働者といえども、一群の生産的労働者を維持するために自分の所得である賃銀を使う」（521）と述べていることから分かるように、必要を超える部分は、賃金労働者においても、生産的労働者の維持するために当てられることになる。スミスは見ていたからだ。したがって、長期的には、賃金部分の増加は、生産的労働者数の増加につながる必要がある。このことを理論的に保証するために要請されたものが、スミスの人口論にほかならない。

¹⁸スミスには、余剰の捌け口理論と呼ばれる独特の外国貿易論があり、このことから、国内市場を必要=交換論として、外国貿易を奢侈=交換論として、理論化したと見る向きもあるかもしれない。しかし、スミスは、「外国貿易は、自国の余剰物資を輸出して他国の物資と交換し、それによって自国民の欲求 want の一部を満たし享楽を増大させる」（II-106 頁）と言っており、外国貿易も基本的に必要=交換論によって理解している。なお、スミスの余剰の捌け口理論については、森田（1997）46-48 頁参照。

¹⁹この視点の移行は、1760年代の穀物取引論争、すなわち、貧者の生存に必要な穀物を自由な市場の取引に委ねてよいのか否か、という論争とも密接に関連しているように思われる。Hont and Ignatieff によれば、スミス以前には「当時のヨーロッパにおける周期的な食糧不足やさらには飢饉、不完全雇用の遍在を前提とすれば、経済学者を自負する人々までもが、労働貧民の生活資料は、飢饉に備えて十分な備えを確保し、穀価高騰の年でも生活資料の価格を規制するための、為政者や中央当局による穀物市場の『統制』によってのみ守られうると考えたのは当然であった」（Hont and Ignatieff（1983）p.13, 訳 16 頁）という。これに対し、スミスは、「もし労働市場と食糧品市場がうるさい干渉から自由になれば、労働の価格と食糧品の価格は長期的には労働貧民が決して飢えないですむように均衡するであろう」（Hont and Ignatieff（1983）p.14, 訳 16-17 頁）と考えた。注意すべきなのは、このスミスの考えは、当時の常識とは程遠く、きわめてスキャンダラスなものであったということである。

1.2 マルクスの商品・貨幣論

1.2.1 マルクスのスミス批判

古典派経済学を批判的に継承したと言われるマルクスは、『資本論』の交換過程論において、スミスとよく似た交換論を展開している。

彼〔商品所有者〕の商品は、彼にとっては直接的使用価値をもっていない。もしそれをもっているなら、彼はその商品を市場をもってゆかないであろう。彼の商品は、他人にとって使用価値をもっている。彼にとっては、それは、直接にはただ、交換価値の担い手でありしたがって交換手段であるという使用価値をもっているだけである。それだからこそ、彼はその商品を、自分を満足させる使用価値をもつ商品と引き換えに、手放そうとするのである。(Marx (1867)S.99、括弧内引用者)

マルクスの使用価値を必要に置き換え、またそれを欲求の対象として理解するならば、この文章は、スミスの必要=交換論をパラフレーズしたものにすぎないことになる。自分にとっての非使用価値、すなわち、必要を超える余剰を、自分にとっての使用価値、すなわち、必要なものと交換する。この解釈に従うかぎり、マルクスはスミスの必要=交換論の系譜に位置づけられよう。

もっとも、マルクスが使用価値という概念で何を言おうとしていたかは必ずしもはっきりしない。確かに、マルクスは、「商品は、さしあたり、外的対象であり、その諸属性によって人間の何らかの種類の欲求 *Bedürfnis* を満足させる物である」(49)と述べて、使用価値を欲求の対象として規定しているが、肝心の「欲求 *Bedürfnis*」を彼がどのように理解しているのかは明確に示されていないのである²⁰。それゆえ、上の解釈の当否を直接に判断することは難しいのだが、スミスの交換論に対する批評を検討することで、マルクスの意図を間接的にせよ浮き彫りにすることは不可能ではない。

スミスの必要=交換論についての直接的な言及は『資本論』にはないが、例えば、『経済学批判要綱』(以下、『要綱』)において、マルクスは、次のように述べている。すなわち、スミスが貨幣の必然性—より正確には、貨幣による価値表現の必然性—を看過していると指摘した上で、その原因を以下の点に求めた。

このことは、スミスが生きた時代の生産の段階に照応しており、この段階では労働者は、まだ彼の生計の一部分を直接彼の生産物で支えており、彼の活動についても、彼の生産物についてもかならずしもその全体が交換に依存するようになっていたわけではない。(Marx (1857/58)S.100-101)

マルクスは、「労働時間はそれ自体直接に貨幣であることは(この要請は、換言すれば、すべての商品が直接それ自身の貨幣であるべきだということと同じことになる)できない」(Marx (1857/58)S.99)と述べて、スミスの労働=本源的購買貨幣説を批判するのだが、この説が「スミスが生きた時代の生産の段階」によって規定されていると主張する。

²⁰Heller (1976)の指摘。「すでにここ『資本論』冒頭の使用価値の定義で、マルクスは欲求の概念を使って定義をおこなっているものの、欲求の概念の定義はしていないことがはっきりしたのではないだろうか。欲求とはそもそも何のことか、彼は一度も書き記していない」(S.??, 訳6頁、括弧内引用者)。

マルクスの批判は、生計の一部だけを交換に頼るような世界ではなく、すべてのものが市場向けに生産され、生計の全体が交換に依存するような世界を想定すべきだと言っているように読める。確かに、マルクスは少し前の箇所でも「交換と分業とは相互に条件づけあっている」(91)と述べており、必要=交換論における分業と交換の相互規定性を認めた上で、分業の全面化を交換論の出発点に置くように主張しているように見える。

しかし、マルクスの意図がこのようなものだとすると、スミスに対する批判としては妥当性を欠くと言わねばならない。なぜなら、必要=交換論が想定する「自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を上回る余剰部分を、他人の労働生産物のうち自分が必要とする部分と交換する」(24)社会——スミスの言う「商業的社会 commercial society」(24)——とは、本来的に、自分の必要の一部を生産し、それを超える余剰を交換に供する社会だからである。マルクスは、スミスの「商業的社会」をいわゆる単純商品生産社会として理解しているが²¹、このような社会を前提にするかぎり、交換のためだけでなく、生計のためにも生産が行なわれることにならざるをえず、生産物の「全体が交換に依存する」ことには決してならない。如上のスミス批判は、それが意味のあるものだとすれば、単純商品生産社会という想定そのものに対する批判として解釈せざるをえないのである²²。

『経済学批判。原初稿』(以下、『原初稿』)において、同様のスミス批判を行なった際に、マルクスが述べていることは、このことを裏付けているように思われる。そこで、マルクスは、「スミスは、交換価値を展開するさいに、交換価値がまだ生産者自身の生存のために生産される使用価値をこえる超過分としてしか現われないような、交換価値の未発展な形態を、交換価値の適的な形態として把握するという誤りをいまだに犯している」(Marx (1858-61)S.52)と述べ、「ブルジョア社会においては交換価値こそが支配的な形態としてとらえられなければならない、その結果、生産者たちの、使用価値としての彼らの生産物に対する直接的関係はすべて消え去っていなければならない、すべての生産物が商業のための生産物としてとらえられなければならない」(Marx (1858-61)S.52)と批判した。マルクスの言う「ブルジョア社会」、すなわち、生産物のすべてが自分にとっての使用価値ではなく交換価値として現われるような社会とは、「近代的工場、たとえば、綿布工場で働くひとりの労働者」を例としてあげていることから見ても、また、この批判がフランスの自作農(単純商品生産者)とイギリスの借地農業者(資本家)の対比という文脈でなされていることから見ても、単純商品生産社会を指しているとは考えにくい。むしろ、独立生産者から成る単純商品生産社会を想定するスミスに対し、資本家と賃労働者から成る資本主義社会を対置したと見るのが自然であろう。したがって、理論的な整合性という点からも、また、こうした解釈の面からも、マルクスのスミス批判は、単純商品生産社会という想定に対する批判として理解するのが妥当だと思わ

²¹ 『剰余価値学説史』(Marx (1861-63)S.363-370)などから見て、マルクスがスミスの「商業的社会」を単純商品生産社会として理解していたことはほぼ間違いないが、これがスミス解釈として妥当なものだったか否かについては議論の余地がある。例えば、羽鳥(1990)は、「スミスの言う『商業社会』は、単純商品生産社会ではなく資本主義的商品生産社会と見なさなければならないだろう」(56頁)として、マルクスの解釈を批判している。なお、単純商品生産社会という言葉に限らずマルクス自身ではなく、エンゲルスが『資本論』第3巻でマルクスの価値法則の妥当性が「単純商品生産」(909)に限られると述べたのがこの用語法のはじまりだと思われる。

²² このことは、『資本論』冒頭商品論においては単純商品生産社会が想定されるべきだという立場に対し、宇野弘蔵が一貫して主張してきたことでもある。宇野は、初期の著作においてすでに、次のように述べている。「商品経済が—社会の根本的社会関係を規定するものになるためには、理論的にはもちろんのこと、具体的にもある程度まで支配的に、あらゆる生産物が、歴史的、具体的にいえばその社会の成員の大部分の人々の生活資料そのものが、商品として買われてはじめて個々の人々の使用に供せられるものにならなければならない。いわゆる単純なる商品経済は、その点で生活資料そのものはなお多かれ少なかれ自家で生産せられ、消費せられながら、その余剰が商品として販売せられるというような関係に立っている」(宇野(1947)211頁)。

れる。

1.2.2 単純商品生産から単純商品流通へ

マルクスのスミス批判が以上のようなものだとすれば、先にあげた交換過程論の叙述がスミスの必要=交換論と同じものとは解しがたい。マルクスの議論は、独立した諸個人が分業と交換によって結びついているような単純商品生産社会ではなく、資本-賃労働関係を前提にしていると考えられる。そうだとすれば、交換過程論の言う自分にとっての非使用価値と使用価値との交換は、「自分自身の労働の生産物のうち自分の消費を上回る余剰部分を、他人の労働生産物のうち自分が必要とする部分と交換する」(24)というスミスの必要=交換論とは異なっているはずである。なぜなら、資本にとっての交換とは、自分の必要を超える余剰を自分の必要とするものとを交換するようなものではないからである。それにもかかわらず、マルクスは、交換過程論を単純商品生産社会を前提とするスミスの必要=交換論と明確に異なるものとしては展開していない。むしろ、一見するとスミスと区別のつかないような議論を行なっている。

この屈折は、交換を導くのは奢侈に対する欲望か、必要に対する欲求かという問いに対して、マルクスが採った方法を反映している。すなわち、スミスが『国富論』を分業論から説き起こすことによって、社会的分業のもとでの独立生産者同士の必要の交換として交換論を展開したのに対し、マルクスは、分業論や生産論を先行させることなく、商品の分析から『資本論』をはじめること、必要/奢侈という問題そのものを商品・貨幣論から捨象したのである²³。

むろん、剰余価値論において、「労働力の所持者の維持に必要な *notwendigen* 生活手段の価値」(185)を超えるものとして剰余価値を規定していることから分かるように、マルクスにとっても必要の問題は決してどうでもよいものではない。マルクスは、必要から奢侈までを連続体と捉えるような相対的な見方には明らかに与していない。こうしてみると、マルクスは、必要とそれを超える余剰の区別を否定したというよりも、この区別を欲求と欲望といった情念の相違から説明するのではなく、階級関係を通じて形成される歴史的な産物として捉えなおしたと見るべきであろう。マルクスの意図がこのようなものだとすると、必要の問題は、資本-賃労働関係が説かれる第2篇「貨幣の資本への転化」の展開をまっけてはじめて扱いうることになり、分業関係や生産関係が捨象される第1篇「商品と貨幣」では、考察されないのも当然と言える。

実際、マルクスは、先に触れた『原初稿』のスミス批判のあと、「交換価値が単純な出発点として表層に現われ、単純流通のなかでくりひろげられる交換過程が、単純ではあるが生産と消費との全体を包括する社会的素材変換として現われるためには、ブルジョア的生産の全体制が前提となっている」(52)と総括した上で、「ところが、このような諸関係は、単純流通 *einfachen Circulation* の立場からは消えてしまっている」と述べている。マルクスによれば、交換過程は、単純商品生産ではなくブルジョア的生産(資本主義的生産)を前提しているが、このような生産関係は、「単純流通 *einfachen Circulation*」という観点からは捨象されるというのである。このような問題意識から、マルクスは、商品・貨幣論を「単純流通」—『資本論』の言い方では、「商品流通 *Warenzirkulation*」

²³ 『資本論』冒頭の使用価値規定に際し、マルクスが述べていることは、欲求の対象が必要か奢侈かという問い自体が商品論では捨象されることを示唆している。「この欲求の性質は、それがたとえば胃袋から生じようと空想から生じようと、少しも事柄を変えるものではない。ここではまた、物がどのようにして人間の欲求を満たすか、直接に生活手段として、すなわち受用の対象としてか、それとも回り道をして、生産手段としてか、ということも問題ではない」(Marx (1867)S.49)と述べている。

(125) または「単純な商品流通 einfachen Warenzirkulation」(128) —として展開した²⁴。マルクスの商品・貨幣論における単純商品流通 $W-G-W$ は、確かに、必要=交換論と形式的には同一であるが、流通の背後にある分業関係や生産関係が捨象されている点で異なるのである。

マルクスの商品・貨幣論の性格がこのようなものだとすると、問われるべき問題は、その先にある。すなわち、商品・貨幣論は、なぜ単純商品流通 $W-G-W$ として説かれねばならないのか。

言うまでもなく、資本主義的生産から生産関係を捨象したからといって、単純商品流通 $W-G-W$ が直接にえられるわけではない。第2篇「貨幣の資本への転化」で明らかにされるように、資本の流通形式は、単純商品流通ではなく、資本流通 $G-W-G'$ である。したがって、第1篇「商品と貨幣」が単純商品流通として展開される理由は、単純商品流通 $W-G-W$ が資本流通 $G-W-G'$ の基礎である、あるいは、単純商品流通 $W-G-W$ の発展したものが資本流通 $G-W-G'$ であるという点に求められねばならない。しかしながら、次のような「貨幣の資本への転化」の展開を見る限り、このような解釈が成り立つ余地はない²⁵。

マルクスは、第2篇「貨幣の資本への転化」において、まず、第1篇「商品と貨幣」で論じた単純商品流通 $W-G-W$ に対し、 $G-W-G$ を外面的に対立させる。そして、導入した $G-W-G$ を「無内容 *inhaltslos*」(162) であると断じ、「その両極がどちらも貨幣なのだから両極の質的な相違によってではなく、ただ両極の量的な相違によってのみ内容 *Inhalt* をもつ」(165) と述べて、 $G-W-G'$ に書き換える。しかし、「商品交換に内在する諸法則」、すなわち、等価交換のもとでは、価値増殖は不可能であるとして、資本流通 $G-W-G'$ に矛盾を設定する。その上で、「価値の源泉であるという独特な性質をその使用価値そのものもっているような一商品」(181)、労働力商品を導入することによって、この矛盾を解決する。

このような「貨幣の資本への転化」の展開から分かるのは、次のことである。資本流通 $G-W-G'$ は単純商品流通 $W-G-W$ からは導出されておらず、むしろ、単純商品流通 $W-G-W$ と対立するものとして捉えられている。また、資本流通 $G-W-G'$ は単純商品流通 $W-G-W$ の法則のもとでは、不可能だとされている。単純商品流通 $W-G-W$ から資本流通 $G-W-G'$ へと連続的に発展するどころか、両者の間には決定的な断絶が横たわっているのである。

マルクスは、労働力商品を導入することで、単純商品流通 $W-G-W$ と資本流通 $G-W-G'$ の断絶は埋められ、前者から後者に転化することができると考えた。しかしながら、労働力商品の導入は、この転化という課題に応えるものではない。労働力商品が架橋するのは、可能だが無内容な $G-W-G$ と内容をもつが不可能な $G-W-G'$ との間のギャップであり、単純商品流通 $W-G-W$ と $G-W-G$ との、したがって、資本流通 $G-W-G'$ との断絶は労働力商品導入によっては埋められない。「貨幣の資本への転化」の課題と回答にはズレがあり、言わば、羊頭狗肉である。こうした難点を考えると、資本流通 $G-W-G'$ の基礎という理由で、単純商品流通 $W-G-W$ から商品・貨幣論をはじめることに対して、根本的な疑問を抱かざるをえない。

問題はこれだけではない。マルクス自身が『原初稿』で指摘しているように、単純商品流通と単

²⁴マルクスの商品・貨幣論の対象が単純流通だとする解釈は、佐藤(1992)第III部第3章、高須賀(1979)第1章などによって提出されている。もっとも、『原初稿』に示されているこの方法をマルクスが一貫して採りつづけたとは言えず、特に『資本論』では、単純商品生産社会を想定しているかのような記述も散見される。この点について、佐藤は、『資本論』よりも『原初稿』を評価する立場から、「マルクスは、『要綱』以後、論理説からしだいに論理=歴史説へ移行していったのではないか」(佐藤(1992)370頁)と推論している。

²⁵資本の循環に着目し、そのなかに単純商品流通と同じ形式を見出そうとする向きもあるかもしれない。確かに、マルクスも言うように、生産資本の循環は、「価値規定を度外視すれば、 $W-G-W(W-G \cdot G-W)$ すなわち単純な商品流通の形式である」(Marx(1885)S.70)。しかし、この解釈を採るにしても、商品・貨幣論が、なぜ他の資本循環ではなく、商品資本の循環から抽象されねばならないのかという点が問題とならざるをえない。

純商品生産社会とは表裏の関係にある。

流通の立場からすれば、他人の諸商品、したがって他人の労働が領有されるのは、自分の商品、自分の労働の譲渡によってのみであるから、流通の立場からすれば、流通に先行する商品の領有過程が労働による領有として現象するのは必然的である。(48)

『原初稿』のこの節が「単純流通における領有法則の現象」と題されていることから分かるように、この文章は単純商品流通の立場から見た領有法則について論じたものである。マルクスによれば、単純商品流通の立場から見れば、商品の領有は自己の「労働による領有」として現われるという。むろん、「現象 *Erscheinung*」(47)と表現されていることから分かるように、商品所有者が実際にどのようにして領有したのかが、ここで問題になっているわけではない。マルクスは、「彼らがどのようにしてそれらの商品の所有者になったのか、その過程は単純流通の背後で進行しており、流通が始まる前に消えてしまっている」(48)と述べている。それにもかかわらず、あるいは、それがゆえに、単純商品流通のもとでは、商品の領有は「労働による領有」として現象する。難解な論理ではあるが、いずれにせよ、ここで述べられているのは、商品・貨幣論を単純商品流通として展開する限り、「労働による領有」という現象は「必然的」であり、したがって、単純商品生産社会という現象は不可避的であるということである。しかし、マルクスの言う通りだとすると、単純商品流通として商品・貨幣論を論じることは、前節でみたスミス批判とは齟齬をきたすことになりはしないか。

この点について、マルクスは、単純商品流通が単純商品生産社会を前提するということを主張しているのではなく、スミスが単純商品生産社会という「現象」に陥ったことを批判しているのだと解釈する向きもあろう²⁶。しかし、これは、スミスに対するイデオロギー批判としては有効だとしても、マルクス自身が、単純商品流通として商品・貨幣論を展開する積極的な理由にはならない。上で見たように、単純商品流通が資本流通の基礎でないとなれば、むしろ、そのような誤った「現象」が生じる見地は採るべきではないということになる。

²⁶佐藤(1992)第III部第3章参照。

参考文献

- Berry, Christopher J. (1994) *The Idea of Luxury: A Conceptual and Historical Investigation*, Cambridge University Press.
- Heller, Agnes (1976) *Theorie der Bedürfnisse bei Marx*, Verlag für das Studium der Arbeiterbewegung. (良知力・小箕俊介訳『マルクスの欲求理論』, 法政大学出版局, 1982年).
- Hirschman, Albert O. (1977) *The Passions and the Interest*, Princeton University Press. (佐々木毅・旦祐介訳『情念の政治経済学』, 法政大学出版局, 1985年).
- Hont, Istvan and Michael Ignatieff, eds. (1983) *Wealth and Virtue: the Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, Cambridge University Press. (水田洋・杉山忠平監訳『富と徳—スコットランド啓蒙における経済学の形成』, 未来社, 1990年).
- Hume, David (1752) *Political Discourses*, in *Essays, Moral, Political, and Literary*, edited by T.H. Green and T.H. Grose, Scientia Verlag, 1964. (小松茂夫訳『市民の国について』, 岩波文庫, 1952, 1982年).
- Loche, John (1689) *Two Treatise of Government*, edited by P. Laslett, Cambridge at the University Press, 1963. (宮川透訳『統治論』, 中央公論社(『世界の名著 27 ロック・ヒューム』, 所収), 1968年).
- Mandeville, Bernard (1714) *The Fable of the Bees, or, Private Vices, Publick Benefits*, Oxford University Press, 1924. (泉谷治訳『蜂の寓話—私悪すなわち公益』, 法政大学出版局, 1985年).
- Marx, Karl (1857/58) *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-1.1, 1.2, Dietz Verlag, 1976, 1981. (資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集(1)(2)』, 大月書店, 1981, 1993年).
- (1858-61) *Ökonomische Manuskripte und Schriften 1858-1861*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-2, Dietz Verlag, 1980. (資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集(3)』, 大月書店, 1984年).
- (1861-63) *Zur Kritik der Politischen Ökonomie* (Manuskript 1861-1863, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-3.1-3.6, Dietz Verlag, 1976-1982. (資本論草稿集翻訳委員会訳『資本論草稿集(4)-(9)』, 大月書店, 1978-94年).

—— (1867) *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, Band I, in *Marx-Engels Werke*, 23, Dietz Verlag, 1962. (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳, 『資本論第1巻』, 大月書店, 1968年).

—— (1885) *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, Band II, in *Marx-Engels Werke*, 24, Dietz Verlag, 1963. (マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳, 『資本論第2巻』, 大月書店, 1968年).

Polanyi, Karl, Conrad M. Arensberg, and Harry W. Pearson, eds. (1957) *Trade and Market in the Early Empire*, The Free Press. (抄録: 玉野井芳郎・平野健一郎編訳, 『経済の文明史』, 日本経済新聞社, 1975年).

Rousseau, Jean-Jacques (1754) *Discours sur l'Origine et les Fondements de l'Inégalité parmi les Hommes*, Editions Sociales, 1954. (本田喜代治・平岡昇訳, 『人間不平等起原論』, 岩波文庫, 1957年).

Smith, Adam (1754) *The Theory of Moral Sentiments*, in *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, 1, edited by D. D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford University Press, 1976. (水田洋訳, 『道德感情論』, 岩波文庫, 2003年).

—— (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited by E. Cannan, The Modern library, 1937. (大河内一男監訳, 『国富論』, 中公文庫, 1978年).

Sombart, Werner (1912) *Liebe, Luxus und Kapitalismus*, K. Wagenbach, 1992. (金森誠也訳, 『恋愛と贅沢と資本主義』, 講談社学術文庫, 2000年).

Steuart, James (1752) *An Inquiry into the Principles of Political Economy*, in *Collected Works of James Steuart*, vol.I-IV, Routledge/Thoemmes Press, 1995. (小林昇監訳, 『経済の原理』, 名古屋大学出版会, 1952, 1982年).

内田義彦 (1953) 『経済学の生誕』, 未来社 (『内田義彦著作集』第1巻, 岩波書店, 1988年, 所収).

—— (1971) 『社会認識の歩み』, 岩波新書 (『内田義彦著作集』第4巻, 岩波書店, 1988年, 所収).

宇野弘蔵 (1947) 『価値論』, 河出書房 (『宇野弘蔵著作集』第3巻, 岩波書店, 1973年, 所収).

佐藤金三郎 (1992) 『『資本論』研究序説』, 岩波書店.

高須賀義博 (1979) 『マルクス経済学研究』, 新評社.

羽鳥卓也 (1976) 『市民革命思想の展開(増補版)』, 御茶の水書房.

—— (1990) 『『国富論』研究』, 未来社.

森田桐郎 (1997) 『世界経済論の構図』, 有斐閣.

森村敏己 (1993) 『名誉と快樂—エルヴェシウスの功利主義』, 法政大学出版局.